

実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせる小学校外国語科指導の工夫 — 伝えたいことを英語表現に結び付けるワークシートを用いたSmall Talkを通して —

三次市立吉舎小学校 尾田 佳奈

研究の要約

本研究は、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせる小学校外国語科指導の工夫について考察したものである。本研究では、児童の伝えたいことを英語表現に結び付けるためにワークシートを作成し、そのワークシートを用いたSmall Talkを行った。ワークシートに児童の伝えたいことを書き出させ、イラストとともに既習表現を示すことで、既習表現に結び付けながら、近い内容に置き換えたり2文で言い換えたりして整理するようにした。その結果、英語でどう表現すればよいか分からないう�があるが、コミュニケーションの目的や場面、状況などに応じて、簡単な語句や基本的な表現を活用して聞いたり話したりすることができるようになった。このことから、伝えたいことを英語表現に結び付けるワークシートを用いたSmall Talkを行うことは、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることに有効であると考える。また、一年間の研究を通して、Small Talkを行う際やワークシートを作成する際の留意点を明らかにすることができた。

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成29年告示、以下「学習指導要領」とする。）の外国語の目標では、「知識及び技能」に関して、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにすると示されている。

所属校第6学年に行った外国語活動についてのアンケートでは、「もっと英語を学んでみたい」という設問に対し、93%の児童が当てはまる回答している。一方で、「外国語活動の授業で話される英語を聞いて、だいたいの内容が分かる」という設問に対して、46%の児童が否定的な回答をしている。また、「これまでに学んだ英語を使って自分の考えや気持ちなどを話すことができる」「外国語活動の授業では、自分が伝えたいと思うことを伝えている」という設問に対しても60%の児童が否定的な回答をしている。その理由として、「英語表現を覚えることができない」「発音が分からない」「英語でどう表現したらよいのか分からない」「自信がない」などの記述がある。アンケートの結果より、児童は、英語を学んでみたいという意欲はあるが、英語を聞いて内容を理解したり、英語で話したりすることができないと感じていることが分かる。所属校では、

昨年度から既習表現を活用してやり取りを行うSmall Talkを行ってきた。しかし、児童が感じているように、英語で話すことに自信がもてず、学んだ表現をそのまま繰り返しているだけで自分の考えや気持ちなどを伝えることができていないという課題がある。これは、Small Talkを行う際に、自分が伝えたいと思うことを考え、伝えさせるのではなく、単元で学んだ表現の中から伝えたいことを選んで英語で伝えさせていたことが原因と考える。

そこで、本研究では、児童に伝えたいことをもたらし、伝えたいことを英語表現に結び付けるためのワークシートを作成する。そのワークシートを用いてSmall Talkを繰り返し行うことで、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることができると考え、本研究主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けることについて

(1) 実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるとは

吉田研作（2017）は、英語教育において、単に知

識や個別の技能を覚えたとしても、それが実際のコミュニケーションにおいて使えなければ意味がないと述べている。また、山田誠志（2018）は、「学習指導要領」外国語における知識・技能とは、言語材料を理解し、それを活用することができる技能のことであるとし、英語表現の定着が必須になると述べている。さらに、直山木綿子（2019）は、外国語における「定着」とは、コミュニケーションの目的や場面、状況において、学習したことをいつでも引っ張り出して使えるということだと述べている。つまり、外国語科における知識・技能を身に付けるとは、外国語科における目標を達成するのにふさわしい言語材料を理解し、コミュニケーションの目的や場面、状況などに応じて言語材料を活用できることであると考える。

「学習指導要領」外国語の目標では、知識及び技能を含めた資質・能力を育成するために、聞くこと、読むこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くことの五つの領域別に設定する目標の実現を目指した指導を行うと示されている。その領域別の目標を見ると、小学校外国語科で理解することが求められている言語材料とは、英語で自分や相手の日常生活に関する身近で簡単な事柄について自分の考えや気持ちを伝えるためにふさわしい簡単な語句や基本的な表現であると考える。ただし、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編（平成30年、以下「29年解説」とする。）では、「読むこと」「書くこと」については、中学年の外国語活動では指導しておらず、慣れ親しませることから指導する必要があり、「聞くこと」「話すこと」と同等の指導を求めるものではないことに留意する必要があると示されている。

これらのことから、本研究において、児童が実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるとは、コミュニケーションの目的や場面、状況などに応じて、日常生活に関する身近で簡単な事柄について自分の考えや気持ちなどの伝えたいことを伝えるために、簡単な語句や基本的な表現を活用して聞いたり話したりすることができることと定義する。

（2）実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせるためには

「29年解説」では、言語材料を言語活動と切り離して「知識及び技能」として個別に指導するのではなく、常に言語活動と併せて指導することが大切であると示されている。小学校外国語科における言語

活動について、小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（平成29年、以下「ガイドブック」とする。）では、実際に英語を用いて互いの考え方や気持ちを伝え合う活動を意味すると述べられている。

田中武夫・田中知聰（2003）は、自分の思いや考え方を伝えるために自分に関連する事柄を表現することは、今までに習ったことを自分のことにつび付けることになるので学習を定着させると述べている。

また、山田（2018）も、「暗記・発表の要素が強い授業」から脱却し、学習した英語表現を想起しながら繰り返し使用する「思考・判断しながら表現する授業」への転換が必要であると述べている。そして、児童は、自分が本当に伝えたいと思ったことを伝えようとしているとき、それを英語で何といえばよいかを学ぶと、その表現を喜んで使おうとすると述べている。

これらのことから、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせるためには、児童が自分に関連する伝えたいことを表現する言語活動を行う必要があると考える。その際、児童にコミュニケーションの目的や場面、状況などに応じて思考・判断させ、伝えたいことを英語表現に結び付けて表現させる必要があると考える。

（3）伝えたいことを表現する言語活動について

「ガイドブック」では、身近な話題について主に児童同士がやり取りする活動としてSmall Talkが位置付けられており、Small Talkを行う際は、指導者や児童が自分自身に関する本当の出来事や気持ちなどについてやり取りすると示されている。そして、Small Talkは、2時間に1回程度、帶活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考え方や気持ちを伝え合ったりすることと示されており、既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ることや対話を続けるための基礎的な表現の定着を図ることを意図した活動であると示されている。

つまり、Small Talkとは、英語表現の定着を図る活動であるが、自分の考え方や気持ちを伝え合う点において主たる言語活動の一つであると考える。そして、Small Talkは、自分の考え方や気持ちを伝え合う点と、年間を通して繰り返し行う活動である点において、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせるための活動として効果的であると考える。

田中ら（2003）は、自分に関連する事柄を表現する自己表現活動では、やり取りする情報にどれだけ

生徒自身が関わっているかが重要であると述べている。ただし、前項で述べたように、小学校外国語科において扱う事柄は、自分や相手の日常生活に関する身近で簡単な事柄である。

したがって、本研究では、伝えたいことを表現する言語活動として、児童が日常生活で体験したり、考えたり、感じたりしたことの中から伝えたいと思うことを、コミュニケーションの目的や場面、状況などに応じて思考・判断しながら表現する Small Talkを繰り返し行うこととする。

2 伝えたいことを英語表現に結び付けるワークシートを用いたSmall Talkについて

(1) 伝えたいことを表現するSmall Talkの流れ

大城賢（2017）は、これまでの英語教育は、「知ることが先で、できるようになるのは後」と考えられていたが、外国語は、「使いながら学ぶ」ということが効果的であると述べている。

白井恭弘（2012）は、アウトプットをやってみると、自分がどこが言えないかが分かり、その後にインプットが入ってくると、そのギャップに新しい形が入ってきて、「ああ、そうなのか」となるとし、学習者にアウトプット活動をさせたら、そこで終わりにするのではなくてもう一度そのあと強化するためインプット活動をやるべきだと述べている。つまり、アウトプットを行う際には、自分が言えなかつたことは何かに気付き、もう一度、言えなかつたことを英語でどう言えばよいかをインプットする必要があると考える。

さらに、山田（2018）は、「考えながら話す力」を育てる上で、自分が言いたいことを英語で言うために使える英語表現を、自分の力で、記憶の中から引っ張り出すことができるようになることが必須だと述べ、児童が活動（やり取り）に取り組む前に、手取り足取り指導するのをやめて、「まずやってみて（対話して）」→「思い出して」→「思い出したことを意識して使う」という過程での指導が必要だと述べている。また、Small Talkへの意欲や自信を低下させないためにも、見通しをもたせるための指導が必要であるとし、Small Talkの指導は、「見通しをもち」→「まずやってみて（対話して）」→「思い出して」→「思い出したことを意識して使う」という過程で指導することにより効果を高めることができると述べている。

以上のことから、児童が伝えたいことを表現する Small Talkの流れと内容を表1に示す。

表1 伝えたいことを表現するSmall Talkの流れと内容

Small Talkの流れ	内容
①見通す（2分間）	指導者のやり取りを聞き、何について、どんな表現を活用して話すのかを知る。
②やってみる（2分間）	1回目のやり取りを行う。
③振り返る（2分間）	うまく伝えられなかつたことについてはどんな表現を学んだかを振り返り、英語でどう表現すれば伝わるかを考えたり、英語表現を教わってインプットしたりする。
④もう一度やってみる（2分間）	インプットしたことを基に2回目のやり取りを行う。
⑤もう一度振り返る（2分間）	伝えたいことを伝えることができたかどうか振り返る。

(2) 伝えたいことを表現するSmall Talkを行うためには

「29年解説」では、自分の考えや気持ちなどを伝えたり、簡単な質問をしたり質問に答えたりして伝え合う活動をする際には、児童が自分の考えをもつことができるようになる指導を必要に応じて行うことが考えられると示されている。また、言語活動を行う際には、児童が言語活動の目的を達成するために、必要な言語材料を取捨選択して活用できるようにすることが必要であるとも示されている。

「ガイドブック」では、児童が自分のことを話す活動においては、児童によって伝えたい内容が広がるため、英語での言い方が分からぬ場合も出てくると述べられている。そして、その場合の指導方法として、言いたいことをそのまま英語で言えないと思ったときでも、あきらめるのではなく、言いたいことに近いことを、既習表現を使って表現すること（「言い換える」という方法）を少しづつ身に付けさせると述べられている。また、山田（2018）は、既習表現を使って言い換える（表現する）ためのポイントとして、言いたい内容を明確にして近い内容に置き換えることや2文に分けることを挙げている。

これらのことから、伝えたいことを表現する Small Talkを行うためには、児童に伝えたいことをもたせ、既習表現の中から使える表現を取捨選択させ活用して表現させることとする。その際、英語での言い方が分からぬことがあるときには、伝えたいことを、既習表現を活用して表せそうな近い内容に置き換えさせたり、2文に分けて言い換えさせたりして表現させることとする。

(3) 伝えたいことを英語表現に結び付けるワークシートについて

児童に伝えたいことをもたせ、既習表現の中から

活用できる表現を取捨選択して英語表現に結び付けるためには、何を伝えたいのかを考えさせ、英語表現に結び付くよう整理させる必要がある。そこで、自分に関する伝えたいことをもたせるために、イメージマップを用い、話題に沿って自由に書き出させる。また、自由に書き出した考えを、既習表現を活用して表せそうな近い内容に置き換えたり、2文に分けて言い換えたりさせることができるワークシートを作成し、伝えたいことをもたせ、英語表現に結び付けるために活用することとする。

ワークシートは、自分の伝えたいことをもたせるSTEP 1、伝えたいことを英語表現に結び付くよう整理させるSTEP 2、やり取りを振り返らせるSTEP 3の三つの視点で構成する。そして、このワークシートを「OK（お！これで言える！）マップ」（以下、OKマップとする。）と呼ぶこととする。三つのステップを経てできあがったOKマップは、伝えたいことをどんな既習表現に結び付け、何が表現でき、できないかが可視化されているため、児童が自己の学習を振り返って達成感を味わうことにもつなげられると考える。OKマップの例を図1に示す。

(4) OKマップを用いたSmall Talkの流れ

児童が伝えたいことを英語表現に結び付けながら表現するために、伝えたいことを表現するSmall Talkの流れに沿ってOKマップを活用していく。OKマップを用いたSmall Talkの流れを表2に示す。

3 研究構想図について

これまで述べてきたことをもとに、研究の構想を図2に示す。

表2 OKマップを用いたSmall Talkの流れ

	Small Talkの流れ	OKマップを活用する過程	・OKマップの活用方法
前時	振り返り	STEP 1 伝えたいことをもたせる STEP 2 英語表現に結び付くよう整理させる	・自分に関する伝えたいことを話題に沿って自由に書き出させる。 ・既習表現を活用して英語でどう表現するか考えさせる。
本時	①見通す（2分間）		・OKマップを見返し、伝えたいことを確認させる。
	②やってみる（2分間）		
	③振り返る（2分間）	STEP 2 英語表現に結び付くよう整理させる	・STEP 1で書いたことを、既習表現を活用してどう表現するか考えさせる。 ・既習表現を活用してそのままでは表現できないものは、近い内容に置き換えたり、2文に分けて言い換えたりさせる。 ・言い方が分からぬときには、ALTやHRTに尋ねさせ、必要に応じて英語で書き加えもらったり、自分で書き写したりさせる。
	④もう一度やってみる（2分間）		
	⑤もう一度振り返る（2分間）	STEP 3 やり取りを振り返らせる	・やり取りを通して伝えたいと思ったことを付け加えさせる。 ・伝えられたことに○をさせる。

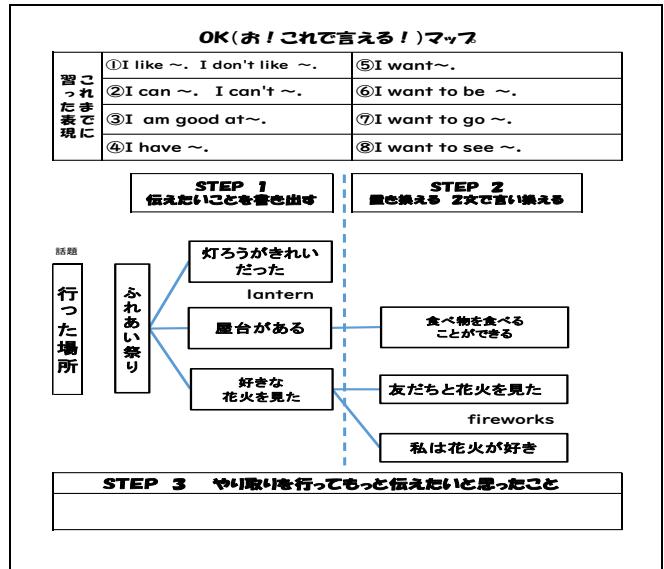


図1 OKマップの例

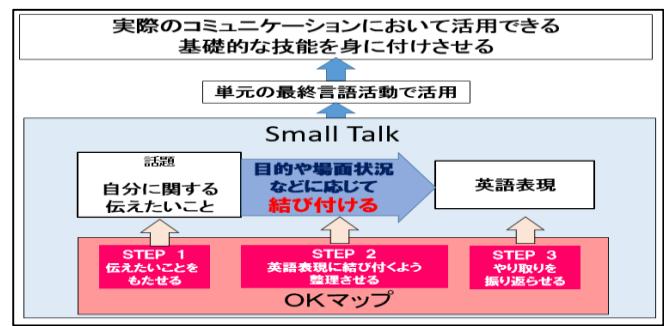


図2 研究構想図

III 研究の仮説及び検証の観点と方法

1 研究の仮説

伝えたいことを英語表現に結び付けるOKマップ

を用いたSmall Talkを行うことで、児童に実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることができるのである。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表3に示す。

表3 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
①実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることができたか。	・行動観察 ・振り返りシート ・事前・事後アンケート
②OKマップを用いたSmall Talkを行うことは、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることにつながったか。	・行動観察 ・事後アンケート ・OKマップ ・学習を終えてのアンケート

IV 前期研究授業の内容

- 期間 令和元年9月5日～令和元年10月1日
- 対象 所属校第6学年（単学級15人）
- 単元名 My Summer Vacation 夏休みの思い出
- 目標

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
・進んで夏休みの思い出について伝え合おうとする。
【外国語への慣れ親しみ】
・夏休みに行った場所や食べた物、楽しんだこと、感想などを表す表現に慣れ親しむ。

【言語や文化に対する気付き】
・英語にも過去の表現の仕方があることに気付く。

○ 単元の評価規準

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
・進んで夏休みの思い出について伝え合おうとしている。
【外国語への慣れ親しみ】
・既習表現を交えながら、聞いたり話したりして夏休みに行った場所や食べた物、楽しんだこと、感想などを表す表現に慣れ親しんでいる。
・夏休みの思い出について簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、例を参考に書いたりすることに慣れ親しんでいる。
【言語や文化に対する気付き】
・英語にも過去の表現の仕方があることに気付いている。

○ 単元の最終言語活動におけるコミュニケーションの目的や場面、状況など

ALTやクラスの友だちとどんな夏休みを過ごしたかを伝え合う。

○ 単元の主な学習活動

	Small Talk の話題	主な学習活動
1		○夏休みに行った場所を伝え合う。
2		○夏休みに行った場所や感想を伝え合う。
3	行った場所	○夏休みに行った場所や感想を伝え合う。
4		○夏休みに行った場所とそこで食べた物の感想を伝え合う。

5	食べた物	○夏休みに楽しんだこととその感想を伝え合う。
6	楽しんだこと	○夏休みの思い出について話を聞き、行った場所、楽しんだこと、食べた物、感想について伝え合う。
7	これまでに楽しんだこと	○夏休みの思い出について書かれた文を推測して読むとともに、他者に配慮しながら夏休みの思い出について伝え合おうとする。
8		○自分の夏休みの思い出について話してきたことを、今まで書き写してきた文を参考に、語順を意識しながら書く。

V 前期研究授業の分析と考察

1 実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることができたか

実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けることができたかどうかを見取るため、単元の最終言語活動「夏休みの思い出をALTや友だちと伝え合おう」において評価を行った。その際、夏休みの思い出を伝えることができているか、相手の言ったことに対して英語表現を用いて反応できているかのそれについて評価基準を設定し、評価した。

表4は、夏休みの思い出を伝えることについての評価基準と人数である。

表4 夏休みの思い出を伝えることについての評価基準と人数
n=15

評価基準		人数(人)
A	夏休みの思い出について、単元で学んだ新出表現だけでなく既習表現も活用して伝えている。	5
B	夏休みの思い出について、単元で学んだ新出表現を活用して伝えている。	10
C	夏休みの思い出について、単元で学んだ新出表現を活用して伝えていない。	0

単元で学んだ新出表現
I went to~. I ate~. I enjoyed~. It was~.
既習表現
I like~. Do you like~? I can~. I can't~. 等

表4から、全員の児童が単元で学んだ新出表現を活用して夏休みの思い出を伝えることができていたことが分かる。また、そのうちの5人の児童が、単元で学んだ新出表現に加えて、既習表現を活用して夏休みの思い出を伝えることができていた。このうちの1人は、「I like~.」の表現を活用して夏休みの思い出を詳しく伝えており、残りの4人は「Do you like~?」の表現を活用して自分の伝えたいことについての相手の思いを尋ねていた。一方で、15人中10人の児童は単元で学んだ新出表現のみを活用し

て伝えていた。この10人の児童は、Small Talkでは既習表現を活用してやり取りをしており、夏休みの思い出を伝えるという目的においては、既習表現を活用する必要がなかったと考える。

表5は、相手の言ったことに対して反応することができているかを見取るための評価基準と人数である。

表5 相手の言ったことに対して反応することについての評価基準と人数
n=15

評価基準		人数(人)
A	既習表現を活用して、感想を言ったり、相手に関する簡単な質問をしたりしている。	0
B	相手の言うことを繰り返したり、一言感想を言ったり、質問に答えたりしている。	11
C	一言感想を言ったり、質問に答えたりしていない。	4

表5より、11人の児童が、相手の言ったことを繰り返したり、一言感想を言ったりして反応していたことが分かる。しかし、相手の言ったことに対して既習表現を活用して感想を言ったり、質問したりすることは、どの児童もできていなかった。

単元の最終言語活動において、夏休みの思い出を伝えることがA評価であり、相手の言ったことに対して反応することがB評価の児童aとALTとのやり取りを次に示す。

児童a : I went to Yamaguchi.	_____ : 単元で学んだ新出表現
ALT : Oh, wow, Yamaguchi!	_____ : 既習表現
児童a : I enjoyed fireworks.	
ALT : Oh, wow!	
児童a : It was beautiful.	
ALT : That's nice!	
児童a : I ate tapioca.	
ALT : Oh.	
児童a : It was delicious. Do you like tapioca?	
ALT : Yes. I love tapioca. I like tapioca milk tea.	
児童a : Oh.	
ALT : Do you like tapioca milk tea?	
児童a : Yes.	
ALT : Oh, wow!	
児童a : How about you?	
ALT : I went to America.	
児童a : Oh!	
ALT : I enjoyed watching a movie. I ate a hamburger.	
児童a : Oh!	
ALT : Do you like hamburger?	
児童a : Yes. I like hamburger.	
ALT : Nice! It was delicious.	

児童aのALTとのやり取り

児童aは、既習表現を活用して「Do you like tapioca?」と質問しているが、これは、自分の伝えたいことについての質問であり、ALTの言ったことに関する質問ではなかったため、B評価とした。

また、C評価の児童bの実際のやり取りを分析してみると、単元で学んだ新出表現を活用して夏休みの思い出を伝えてはいるが、ALTの言ったことはうなづくだけで、英語表現を用いて反応することができていなかった。

これらのことから、実際のコミュニケーションにおいて、単元で学んだ新出表現を活用しながら伝えることはできていたと考える。しかし、児童が既習表現を十分に活用しながら夏休みの思い出を伝えることには課題があることが分かった。これは、単元の最終言語活動の目的が、「夏休みの思い出を伝え合う」ことになっており、「何のために」伝え合うのかを児童と共有することが不十分であったためと考える。また、相手の言ったことに対して、その場で、既習表現を活用して感想を言ったり、質問したりしながらやり取りすることについても課題があることが分かった。これは、やり取りの際の指導において、伝えることに重点を置いており、相手の言ったことに対して反応することについての指導が不十分であったためと考える。

2 OKマップを用いたSmall Talkを行うことは、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることにつながったか

(1) OKマップを用いることは児童が伝えたいことをもち、英語表現に結び付けることにつながったか

ア OKマップを用いることは児童が伝えたいことをもつことにつながったか

OKマップの分析から、全員の児童が伝えたいことを書き出しており、伝えたいことをもつことができたことが分かった。また、学習を終えてのアンケート（以下、アンケートとする。）では、「OKマップは何を伝えたいのか考えるのに役立ったか」という設問に対して、全員の児童が肯定的回答をしていた。その理由として、「書くことで（伝えたいことが）分かる」「一つ伝えたいことが浮かんだら、そこから伝えたいことが出た」と記述していた。このことから、OKマップに書き出すことで、伝えたいことを整理したり、より広げて考えたりしたことが分かる。

したがって、OKマップを用いることは、児童が伝えたいことをもつことにつながったと考える。また、児童の中には、伝えたいことが明確になったことで、英語でどのように表現したらよいか分からな

いことがあっても「～はどう言つたらいいですか」と指導者に尋ねる姿や、指導者やALTに教わった表現を自分から進んで繰り返し練習している姿が見られ、英語で伝えたいという意欲やどのように表現すればよいか知りたいという意欲を高めることにもつながったと考える。

イ OKマップを用いることは児童が伝えたいことを英語表現に結び付けることにつながったか

児童が伝えたいことを英語表現に結び付けることにつながったかどうかを検証するために、OKマップに書かれていたことをSmall Talkで表現しているかについて分析した。OKマップに書き出した伝えたいことを英語表現に結び付けていた児童は、15人中11人であった。そのうち、児童cと児童dのOKマップの記述の一部を表6に示す。

表6 OKマップの記述の一部

	STEP 1	STEP 2
近い内容に置き換えた例 (児童c)	かき氷とソフトクリームのお店がある。	かき氷が食べられる。 ソフトクリームが食べられる。
2文にして言い換えた例 (児童d)	おばけやしきがこわいけど楽しかった。	こわい(けど) 楽しかった

児童cは、かき氷とソフトクリームのお店があったことを「食べることができる」と近い内容に置き換え、「I can eat shaved ice.」と表現していた。

児童d児は、1回目のSmall Talkでは、アトラクションが楽しかったこととお化け屋敷が怖いけど楽しかったことを「I enjoyed attraction, obakeyashiki. Scary.」と単語を並べて表現していた。そして、2回目のSmall Talkでは、「I enjoyed attraction and obakeyashiki. It was scary but fun.」と表現していた。これは、OKマップを用いて2文に分けて整理したことで、お化け屋敷が楽しかったことも「I enjoyed ~.」と表現できることや感想を伝えるには「It was~.」の表現を活用できることに気付いたためと考える。

これらのことから、英語での言い方が分からないとき、既習表現に結び付けるためにどのように考えればよいかを示したOKマップを用いることは、児童が伝えたいことを英語表現に結び付けることにつながったと考える。

一方で、OKマップに書き出したことを伝えるために、既習表現の中から活用できる表現を取捨選択

し表現することができなかった児童は4人であった。そのうちの児童eが記入したOKマップの記述を図3に示す。

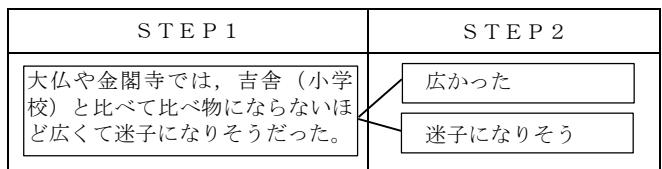


図3 児童eが記入したOKマップ

児童eは、日本語では2文に言い換えていたがSmall Talkでは英語で表現していなかった。児童eは、アンケートにおける「OKマップは、自分の伝えたいことを英語でどう表現すればよいのか考えるのに役立った」という設問に対して、否定的な回答をしていただだ1人の児童である。児童eは、その理由として「(英語表現に結び付けるのが)むずかしかった」と記入していた。これは、伝えたかったことを2文にして置き換えたが、それでもまだ、既習表現で表すことができなかつたためであると考える。また、英語でどう表現すればよいか分からぬときに、できないとあきらめてしまい、ALTや指導者に尋ねることができなかつたためであると考える。

したがって、伝えたいことを英語表現に結び付けることができなかつた児童にも有効なOKマップになるよう、既習表現を想起するための手立てや英語表現に結び付けるための考え方を分かりやすく示して改善を図ることとする。

(2) OKマップを用いたSmall Talkを行うことは、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることにつながったか

アンケートでは、「Small Talkを行うことは、夏休みの思い出を伝えるのに役立った」という設問に対して、全員の児童が肯定的回答をしていた。その理由として、「どう言えばよいか分からぬときに、話しが分かるから」「英語を話せているか不安だったけれど、Small Talkをすると自信がもてる」と記述していた。このことから、児童は、Small Talkを行うことで、自分の言えることと言えないことが分かり、Small Talkで実際にやり取りを繰り返し行うことで、自信をもてるようになったと考えていることが分かる。

また、本单元で行ったSmall Talkを分析してみると、回数を重ねるたびに、児童はだんだんと伝えた

いことを英語で表現したり、一言感想を言ったりすることができるようになっていた。これは、Small Talkの流れにおける①見通す場面のデモンストレーションで既習表現や反応する際の表現を繰り返し聞いたり、②やってみる場面や④もう一度やってみる場面において既習表現を活用して表現したりすることで、英語表現が身に付き、自信をもつことができたためと考える。

②やってみる場面で上手く伝えられないことがあっても、④もう一度やってみる場面において伝えることができるようになった児童fの発言の変化を表7に示す。

表7 Small Talkの流れにおける児童fの発言の変化

Small Talkの流れ	児童fの発言の変化
②やってみる	I enjoyed (日本語で) 花火. 花火 beautiful.
④もう一度やってみる	I enjoyed fireworks. It was beautiful.

これは、②やってみる場面において自分が言えなかったことに気付き、③振り返る場面において、上手く伝えられなかつたことを全体で共有して、英語で何と言えばよいか考えたり教わったりしたためであると考える。そして、児童fとペアであった児童は、Small Talkで学んだ「fireworks」を単元の最終言語活動で活用していた。

これらのことから、OKマップを用いて児童が伝えたいことを英語表現に結び付けながらSmall Talkを行うことは、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることにつながると考える。

しかし、課題も残った。児童同士のSmall Talkでは、全員の児童が、お互いに伝えたいことだけを言い合ったり、一言で反応したりするだけで、相手が伝えたことに対して感想を言ったり、質問をしたりすることができていなかつた。これは、Small Talkの目的が不明確であったために、「もっと自分のことを分かってほしい」「もっと相手のことを知りたい」と思う活動になっていなかつたためと考える。そして、指導者自身も伝えることに重点を置いて指導を行っていたため、相手の言ったことに対して一言感想に留まらない感想を言ったり、質問したりする姿を児童に見せることができなかつたためと考える。また、⑤もう一度振り返る場面においては、伝えたいことを伝えることができたか振り返らせただけで、相手の言ったことに対して反応したり質問したりすることができたかどうかについては振り返ら

せていなかつた。さらに、③振り返る場面において、一人一人の児童の伝えられなかつたことに対応すると、時間がかかりすぎて、全員の児童のうまく伝えられなかつたことを取り上げられなかつた。また、全員で考えたり、指導者に教わったりしても、2回目のやり取りで表現することができなかつた児童もいた。これは、表現を聞かせ、実際に声に出て言わせるだけで、言えるかどうか確認することができていなかつたためと考える。

以上のことから、Small Talkの目的を明確にすることやSmall Talkの流れの内、特に①見通す場面③振り返る場面⑤もう一度振り返る場面において指導の改善が必要であると考える。

VI 前期研究のまとめ

1 前期研究における成果と課題

- OKマップを用いることは、児童が伝えたいことをもつために有効であることが分かった。
- Small Talkの流れにおける①見通す場面では、指導者が見せるデモンストレーションに既習表現を想起させる効果があることが分かった。
- OKマップを用いたSmall Talkを行うことは、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることに一定の効果があることが分かった。

2 前期研究における課題

- 単元の最終言語活動やSmall Talkが、相手の言ったことに対して反応したり質問したりして伝え合いたくなるような活動になつていなかつた。
- 伝えたいことを英語表現に結び付ける際に、どのように考えればよいか分からず、英語表現に結び付けることができない児童がいた。また、伝えたいことを伝えるためだけの視点でOKマップを作成していたため、相手の言ったことに対して反応したり質問したりする際の手立てにはなつていなかつた。
- 伝えることに指導の重点を置いていたため、①見通す場面では、相手の言ったことに対して反応したり、質問したりする様子を見せることができていなかつた。また、⑤もう一度振り返る場面においても、相手の言ったことに対して反応したり質問したりできたかを振り返らせることができなかつた。

さらに、③振り返る場面では、全員の児童のう

まく伝えることができなかつたことを取り上げる時間や児童が新しく考えたり教わったりしたことを次のやり取りで活用することができるよう、表現に慣れさせる時間を確保したりすることができていなかつた。

3 後期研究に向けての改善点

- Small Talkや単元の最終言語活動において、何のために聞いたり話したりするのかというやり取りの目的を明確にし、既習表現を活用してやり取りを行う必然性のある活動を設定する。
- 英語表現に結び付けることができないときの手立てとなる考え方や相手の言ったことに対して反応する際の英語表現についてOKマップに追記する。また、OKマップに示した手立てが用いられる場面を①見通す場面のデモンストレーションにおいて見せる。
- Small Talkの流れにおいて、①見通す場面のデモンストレーションではどんなことを示せばよいか、③振り返る場面においては、うまく言えなかつたことをどのように取り上げるか、⑤もう一度振り返る場面では何を振り返らせるかを考え、時間設定も見直す。

VII 後期研究

1 既習表現を活用してやり取りを行う必然性のある活動にするために

「ガイドブック」では、対話活動が外形的なものとならないようするために留意することとして、①対話する目的があること、②対話する（伝え合う）内容が互いに未知であることが挙げられると示されている。また、山田（2018）は、当該英語表現を用いて意味・内容についてやり取りを行えるようにするためには、「その英語表現を用いないとやり取りが成立しない目的・場面・状況」をよく考えることが必要であると述べている。そこで、単元の最終言語活動やSmall Talkの目的を設定する際には「何のためにやり取りを行うのか」を明確にし、やり取りを行う目的を児童と共有する。そして、既習表現を活用して詳しく伝えたり、相手のことを引き出したりする必要のある活動を設定するようにする。

2 OKマップの改善について

前期研究におけるOKマップの課題について、改善したOKマップを図4に示す。そして、太枠で示

した改善部分のA～Eについて説明する。

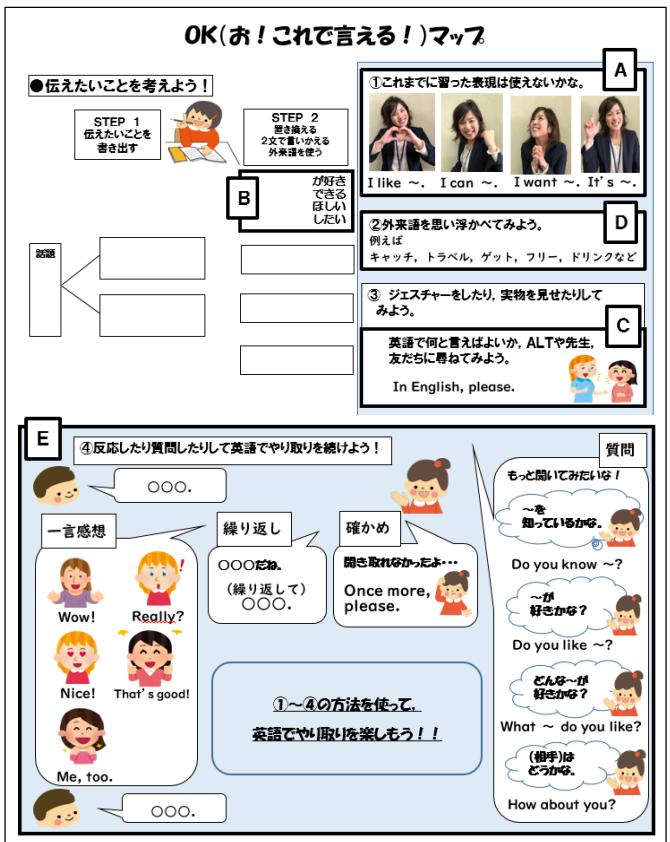


図4 改善したOKマップ

(1) 既習表現を使って伝えたいことを近い内容に置き換えたり、2文にして言い換えたりして伝えるために

前期研究では、既習表現を文字で示すことで想起させたいと考えていた。しかし、文字で示しただけでは意味を理解して音声化できない児童もいた。そこで、英語の意味と結び付けながら表現を想起することができるよう、写真やイラストと一緒にOKマップに示す(A)とともに、伝えたいことを既習表現に結び付けることができるよう 「～が好き」や「～できる」という語尾を示して(B)考えさせるようにする。

(2) 伝えたいことを表す英単語や表現が分からぬとき、自分で考えたり指導者に聞いたりできるようにするために

伝えたいことを英語表現に結び付けることができなかつた児童の中には、ジェスチャーや擬音語を使って何とか伝えようとしていた児童もいた。そういう児童は伝えたいことを英語で言いたくて指導者に尋ねることが多かつた。しかし、尋ね方が分からず、最後までジェスチャーだけで終わってしまう児

童もいた。そこで、分からぬことを教わるための表現をOKマップに示す (C)。

また、金森強（2017）は、使える語彙を増やすために利用できるのが外来語であるとし、知っている単語が増えれば、言語活動が楽しくなると述べている。さらに、児童が外来語として知っている単語やフレーズは、発音の違いこそあれ、うまく活用すれば語彙を増やすだけでなく、日本語と外国語との音声的な違いに気付くことにも役立つと述べている。そこで、英語でどう表現すればよいか分からぬ単語があったときには、似た意味の外来語を想起させ英語表現に結び付けさせる (D) ようにする。

(3) 相手の言ったことに対して反応したり質問したりしてやり取りできるようにするために

伝えたいことを一方的に伝えるだけでなく、相手の言ったことに対して、自分の伝えたいことを英語表現に結び付けながら反応したり質問したりするために、反応するときの既習表現をOKマップに示す (E) こととする。

3 Small Talkの流れにおける指導の改善について

Small Talkの流れの①見通す場面③振り返る場面
⑤もう一度振り返る場面の指導の改善を図る。

①見通す場面では、相手の言ったことに対して既習表現を活用して感想を言ったり、質問したりする様子も見せるようになる。そして、伝えたいことを表す英語表現が分からぬときには、OKマップに示した手立てが用いられる場面についても実際のコミュニケーションの中で示しながらデモンストレーションを行う。

また、名畠目真吾（2018）は、話すことにおいては、まず初期段階として口慣らしを行い、次の段階として表現に言い慣れるようにし、そして最後にコミュニケーション活動を通して習得した表現を実際に活用できるようになると述べている。そこで、③振り返る場面では、新しく考えたり教わったりした表現を④もう一度やってみる場面で表現することができるよう、何度か声に出して言わせる口慣らしの時間を設定し、表現に慣れ親しませるようとする。

さらに、⑤もう一度振り返る場面では、伝えたいことを伝えることができたかだけでなく、相手の話を聞いて反応することについても振り返ることができるようになる。

以上のことを基に、改善したOKマップを用いたSmall Talkの流れを表8に示す。

表8 改善したOKマップを用いたSmall Talkの流れ

: 改善点

	学習活動	OKマップを活用する過程	●Small Talkの内容 ・OKマップの活用方法
前時	振り返り	STEP 1 伝えたいことをもたせる STEP 2 英語表現に結び付くよう整理させる	・自分に関する伝えたいことを話題に沿って自由に書き出させる。
本時	Small Talk	①見通す (1分間)	●指導者のやり取りを聞き、何について、どんな表現を活用して話すのかを思い出させる。 ●OKマップに示した手立てが用いられる場面を実際のコミュニケーションの中で示しながらデモンストレーションを行う。
		②やってみる (2分間)	●1回目のやり取りを行わせる。
		③振り返る (4分間)	●どんな表現を学んだかを振り返らせ、英語で表現を考えさせたり教わったことをインプットさせたりする。 ・STEP 1で書いたことを、既習表現を活用してどう表現するか考えさせる。 ・既習表現を活用してそのままで表現できないものは近い内容に置き換えたり、2文に分けて言い換えたりさせる。 ・OKマップを参考に、外来語を想起させたり、全員で教え合ったりして英語表現を考えさせる。 ・言い方が分からぬときには、ALTやHRTに尋ねさせ、必要に応じて英語で書き加えてもらったり、自分で書き写したりさせる。 ●考えたり教わったりした表現を声に出して練習させ口慣らしを行わせる。
		④もう一度やってみる (2分間)	●インプットしたことを基に2回目のやり取りを行わせる。
		⑤もう一度振り返る (1分間)	●伝えたいことを伝えることができたか振り返らせる。 ●相手の話を聞いて反応することについても振り返らせる。

VIII 後期研究授業の内容

- 期間 令和元年11月19日～令和元年12月12日
- 対象 所属校第6学年（単学級15人）
- 単元名 I like my town. 自分たちの町・地域
- 目標

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
・進んで地域のよさや課題などについて自分の考えや気持ちを伝え合おうとする。
【外国語への慣れ親しみ】
・地域にどのような施設があるのか、また欲しいのか、さらに地域のよさなどを表す表現に慣れ親しむ。
【言語や文化に対する気付き】
・アメリカと日本の地域の様子についての共通点や相違点に気付く。

○ 単元の評価規準

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
・進んで地域のよさや課題などについて自分の考えや気持ちを伝え合おうとしている。
【外国語への慣れ親しみ】
・既習表現を交えながら、聞いたり話したりして地域にどのような施設があるのか、また欲しいのか、さらに地域のよさなどを表す表現に慣れ親しんでいる。
・自分たちの地域について簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、例を参考に書いたりすることに慣れ親しんでいる。
【言語や文化に対する気付き】
・アメリカと日本の地域の様子についての共通点や相違点に気付いている。

○ 単元の最終言語活動におけるコミュニケーションの目的や場面、状況など

ALTに休みの日を楽しく過ごしてもらうために、三次市のおすすめの場所を紹介しよう。

○ 単元の主な学習活動

	Small Talk の話題	学習活動
1		○「私たちの町には～がある」「私たちの町には～がない」という表現を聞く。
2		○「私たちの町には～がある」「私たちの町には～がない」という表現を聞いたり話したりする。
3	行ってみたい場所	○自分が住んでいる地域にある施設やそのよさについて聞いたり話したりする。
4	クリスマスに欲しいもの	○地域にあってほしい施設とその理由について聞いたり話したりする。
5	おすすめのお店	○三次市のおすすめの場所について伝え合う。
6	好きなもの（食べ物、スポーツ、テレビ番組から選択）	○相手の思いを聞き取りながら伝えるための表現に慣れ親しむ。
7		○相手の思いを聞き取りながら、三次市のおすすめの場所について伝え合う。
8		○自分たちが住む地域について話をこと整理して、語順を意識しながら書き出す。 ○お互いに書いたポスターを推測しながら読む。

IX 後期研究授業の分析と考察

1 実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることができたか

実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けることができたかどうかを見取るため、単元の最終言語活動「ALTに休みの日を楽しく過ごしてもらうために、三次市のおすすめの場所を紹介しよう」において評価を行った。その際、相手の思いを聞きながら、おすすめの場所を伝えることができていたか評価基準を設定した。評価基準とその人数を表9に示す。

表9 相手の思いを聞きながら、おすすめの場所を伝えることについての評価基準と人数

評価基準		n=13
A	相手の思いを聞きながら、三次市のおすすめの場所とその魅力を二つ以上伝えている。	3
B	相手の思いを聞きながら、三次市のおすすめの場所とその魅力を一つは伝えている。	7
C	相手の思いを聞きながら、三次市のおすすめの場所を伝えることができていない。	3

単元で学ぶ表現
We have ~. We can ~. Do you like ~?

表9より、欠席児童2人を除く13人中10人の児童が「Do you like ~?」とALTの好みを聞きながら、既習表現を活用して三次市のおすすめの場所について伝えることができたと分かる。中でも、A評価の児童は、様々な既習表現を活用しておすすめの場所について詳しく伝えることができた。A評価の児童gとALTとのやり取りを示す。

児童g, ALT: Hello. 児童g: Do you like sports? ALT: Yes, I do. Do you like sports? 児童g: Yes. I like soccer. We have Kisa Park. We can play soccer, baseball. ALT: Can we play basketball? 児童g: No. Kisa Park is big. ALT: Oh, thank you. I'll go to Kisa Park.	:既習表現
--	-------

児童gとALTとのやり取り

ALTにバスケットボールをすることができるかを尋ねられた児童gは、質問の内容を理解して「No.」と答えた。そして、バスケットボールはできないけれど吉舎公園が広いことを伝えたくて、既習表現を活用できる「Kisa Park is big.」と伝えることができた。これは、コミュニケーションの目的を、「ALTに休みを楽しく過ごしてもらうために」と設定したことで、ALTに喜んでもらうためには、ALTの好きなことなどを聞きながら伝えたいことを伝える必要があると考え、目的に応じて思

考・判断しながら表現できたためと考える。

一方で、3人の児童が、ALTにおすすめの場所を伝える際に一人で伝えることができなかつた。これらの3人の児童は、ALTに「Please tell me about Miyoshi.」と慣れ親しんでいなかつた表現で話しかけられたため、緊張して、これまでに学習してきた表現を忘れてしまつた。そして、指導者が「三次市のどこを紹介したかったの?」「そこでできることは何だった?」と支援して初めて、ALTに伝えることができた。しかし、この3人の児童は、友だちとのやり取りの際には、相手の思いを聞きながら三次市のおすすめの場所を伝えることができていた。

これらのことから、単元の最終言語活動では、相手によって違いはあるが、友だち同士ではやり取りをすることができており、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けさせることができたと考える。

2 OKマップを用いたSmall Talkを行うことは、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることにつながったか

(1) OKマップを用いることは児童が伝えたいことを英語表現に結び付けることにつながったか

ア アンケートの分析から

アンケートでは、「OKマップは、自分の伝えたいことを英語でどう表現すればよいのか考えるのに役立つ」という設問に対して全員の児童が肯定的な回答をしていた。

前期研究においてこの設問に否定的な回答をしていた児童eは「(英語表現に結び付けるには)言いかえればよいことが分かつた」と記述していた。児童eは、OKマップに書き出した伝えたいことを、近い内容に置き換え、文字で示された既習表現に○をして線でつなぎ英語表現に結び付けており、実際のSmall Talkにおいて表現していた。これは、OKマップを改善した際に、「～が好き」「～できる」などの語尾を示したことで、伝えたいことをどの既習表現に結び付けられるかを考えやすくなつたためと考える。また、15人中6人の児童が、「いろんな言い方を知れて、会話がよくなつた」「反応の仕方が書いてあって、質問などができるようになったから」「質問が思い出せた」などと記述していた。

さらに、アンケートにおける、「OKマップのどの部分が役立つたか」という設問に対する児童の回答を表10に示す。

表10 OKマップの役に立った項目とその人数 n=15

項目(複数回答可)	計(人)
これまでに習った表現	10
外来語	8
ジェスチャー	7
反応・質問	14

表10より、15人中14人の児童が、相手の言ったことに反応したり質問したりする表現を示した部分が役に立つたと述べている。

そして、「英語でやり取りをするときに、もっと役立つOKマップにしていくためにはどうすればよいと思うか」という設問に対しても、「反応や質問の言葉を増やしてほしい」「一言感想を使うときの例やどういう意味かがあった方がいい」「We have ~.やWe can ~. (本単元で学ぶ新出表現)を加えればいい」などの記述があった。児童は、OKマップに、やり取りを行う際に必要な表現や単元で学んだ新出表現を加えてほしいと感じており、OKマップを、英語表現を想起するためのヒントカードとして活用していたことが分かる。

イ OKマップの記述とSmall Talkの分析から

前期研究において伝えたいことを英語表現に結び付けることができなかつた児童は4人いたが、これらの児童の全員が、5回のSmall Talkのうち4回のSmall Talkにおいて伝えたいことを英語表現に結び付けることができていた。これらの児童は、Small Talkの話題について、OKマップに伝えたいことを短い言葉で簡潔に記したり、語尾を「～が好き」「～できる」と表したりすることができていた。

さらに、他の11人の児童も、外来語を基にして英語表現を想像したり、ジェスチャーを使つたりしてなんとか表現していた。そのため、指導者や友だちから英語表現を教わることにつながり、英語表現に結び付けて表現していた。また、英語でどう表現すればよいか分からぬことがあった児童も、「In English, please.」「先生、教えて」と尋ねて教わり、伝えたいことを英語表現に結び付け表現していた。

これらのことから、OKマップに、既習表現に結び付けられるように語尾を示したことや外来語を示したこと、分からぬことを教わるための表現を示したことは、児童が既習表現を想起する際の手助けとなり有効であったと考える。

以上のことから、OKマップを用いることは、児

童が伝えたいことを英語表現に結び付けることにつながったと考える。

一方で、後期研究においては、OKマップを英語表現に結び付くよう整理するために用いるというより、相手の言ったことに対して反応したり質問したりするためのヒントカードとして用いている児童が多くいた。そのため、児童の実態に合ったOKマップとなるよう、必要なものは何かを判断し、改善していく必要があると考える。

(2) OKマップを用いたSmall Talkを行うことは、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることにつながったか

アンケートでは、「OKマップを用いたSmall Talkを行うことは、ALTに三次市のおすすめの場所を紹介するときに役立った」という設問について、全員の児童が肯定的回答をしていた。その理由の一部を示す。

- ・話題に対してのいろいろな気持ちの言い方をどんどん覚えて、「この表現も使ってプリタニー先生に伝えよう」と考えて伝えることができたから。
- ・プリタニー先生とやる時に緊張してすこしとんでいたけど、Small Talkの時に言ったことを思い出してできた。
- ・Do you like? やHow about you?などを使って話すことができたから。

アンケートの記述（一部）

アンケートの記述より、児童は、ALTと話す場面を考えながらSmall Talkを行っていたことや、Small Talkで活用した表現を想起しながらALTと話していたことが分かる。

のことから、OKマップを用いたSmall Talkを行うことは、単元の最終言語活動を行う際に役立つたと考える。

また、本単元で行ったSmall Talkを分析してみると、前期の研究において、相手の言ったことに対して反応することについての評価基準でC評価となった4名の児童は、全員が一言感想を言ったり、相手の言ったことを繰り返したりして反応しながらやり取りを継続することができた。後期の研究でB評価となった児童bと児童hとのやり取りを示す。

児童b : What do you want?
児童h : I want new game, Mario Maker.
児童b : Oh, nice!
児童h : What do you want?
児童b : I want new game, Pokemon.
児童h : Wow, very good!

児童bと児童hとのやり取り

児童bは、③振り返る場面において、OKマップを見て感想を伝える表現を確認し、声に出して練習していた。そして、④もう一度やってみる場面で表現することができていた。これは、①見通す場面のデモンストレーションにおいて相手の言ったことに対して反応する様子を見せることで既習表現を想起することができたり、⑤もう一度振り返る場面において、振り返りにおいて反応することを意識せたりすることができたためと考える。

さらに、児童iは、②やってみる場面において、「Pretzelがおいしい」を英語でどう表現すればよいか分からず、「Pretzel delicious.」と表現し、③振り返る場面において、友だちと考え、指導者に尋ねていた。そして、指導者に「Pretzel is delicious.」と表現することを教わると、口慣らしの時間に何度も声に出して練習し、④もう一度やってみる場面において伝えることができていた。これは、口慣らしの時間を設定し、考えたり教わったりした表現を何度も声に出して練習できることで表現に慣れれたためと考える。また、上手く伝えることができなかつたことを友だち同士で相談し合うことは、③振り返る場面での時間短縮にもつながった。

したがって、OKマップを用いたSmall Talkを行うことで、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることにつながったと考える。

X 研究のまとめ

1 研究の成果

伝えたいことを英語表現に結び付けるOKマップを用いたSmall Talkを行うことで、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けさせることができると分かった。そして、OKマップを用いることで、伝えたいことをどの既習表現を活用して伝えるかを児童に考えさせることができ、主体的に英語表現を学ぼうとする意欲を高めることにもつながった。本研究を通して明らかになったSmall Talkを行う際とOKマップを作成する際の留意点を示す。

(1) Small Talkを行う際の留意点

ア 単元の最終言語活動を見通してSmall Talkの計画を立てる

Small Talkの計画を行う際には、まず、既習表現を交えて行う単元の最終言語活動をイメージする。次に、単元の最終言語活動までに児童が既習表現を

想起することができるよう、Small Talkを位置付ける。そして、Small Talkを行う目的や場面、状況を考える。

イ 目的を明確にし、児童と共有する

既習表現を活用することが目的とならないよう、児童がコミュニケーションの目的や場面、状況などに応じて、伝えたいことをどの既習表現を活用して伝えるかを思考・判断しながら表現することができるよう、「何のためにやり取りを行うのか」を明確にし、児童と共有する。

ウ デモンストレーションを工夫する

①見通す場面のデモンストレーションを行う際には、英語表現が分からぬときにも、指導者が何とかして伝えようとしている様子を見せるようにする。その際、ジェスチャーを使ったり、絵を描いたり、外来語から英語表現を想像しながら話したりする様子を見せる。また、相手の話を聞いて反応したり質問したりしている様子を見せる際には、まずは、相手の言ったことを繰り返したり、一言感想を述べたりすることを見せ、児童が反応することに慣れてきたら、相手の言ったことに対して質問する様子を見せる。

エ 口慣らしの時間を設定する

新たに考えたり、教わったりした表現を、もう一度やってみる場面において伝えることができるよう、何度も声に出して練習する時間を設定する。

(2) OKマップを作成する際の留意点

OKマップを作成する際には、「児童に伝えたいことをもたせる」「伝えたいことを英語表現に結び付くよう近い内容に置き換えたり、2文にして言い換えたりして整理させる」「英語表現に結び付けるために必要な既習表現を示す」の三つの視点を入れるとよい。

また、一年間の研究を通して、児童のOKマップの使い方が変化していることが分かったため、次のように工夫することもできる。

児童は、伝えたいことを、英語で表現できないことがあっても、既習表現を活用できそうな近い内容に置き換えたり、2文に分けて言い換えたりすれば表現できることが分かると、OKマップを用いて整理することなく、英語表現に結び付くように考えることができるようになった。そのため、伝えたいことを書き出す部分については、OKマップではなく授業の振り返りシート等に書かせることにより、時間の削減もできると考える。

また、Small Talkを繰り返すことで、既習表現が

定着するようになると、児童がOKマップに示してほしいと望む英語表現が変わっていった。そのため、既習表現を示す部分については、児童の実態に合わせて、示す英語表現を変えていく必要がある。OKマップに示した既習表現が定着し、活用できるようになると、既習表現を削除して、単元で学んだ新出表現や相手の言ったことに対して反応したり質問したりするための表現を示すことも考えられる。

そして、最終的には、OKマップを用いることなくやり取りができるようにしていく。

2 研究の課題

児童の実態に合わせてOKマップに示す内容を検討する必要がある。今後も実践を重ね、個々の児童にとって必要な内容が示されているOKマップになるよう、児童の実態に合わせたOKマップを作成していく。また、本研究では第6学年のSmall Talkを扱ったが、第5学年のSmall Talkでも活用できるOKマップを作成し活用していく。

【参考文献】

- 文部科学省（平成29年告示）：『小学校学習指導要領』
吉田研作（2017）：『2019年度版 小学校新学習指導要領の展開』明治図書出版
山田誠志（2018）：『自分の本当の気持ちを「考えながら話す」小学校英語授業－使いながら身に付ける英語教育の実現－』日本標準
直山木綿子（2019）：『なぜ、いま小学校で外国語を学ぶのか』小学館
文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編』開隆堂出版
文部科学省（平成29年）：「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaiko_kugo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_1.pdf
田中武夫・田中知聰（2003）：『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店
大城賢（2017）：『平成29年度版 小学校新学習指導要領 ポイント整理 外国語』東洋館出版社
白井恭弘（2012）：『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店
金森強（2017）：『6 語彙指導の在り方』金森強・本多敏行・泉恵美子編著『主体的な学びをめざす小学校英語教育 教科化からの新しい展開』教育出版
名畑目真吾（2018）：『第11章 指導計画の作成と指導の留意点』卯城祐司編著『MINERVAはじめて学ぶ教科教育⑤ 初等外国語教育』ミネルヴァ書房
村端五郎（2018）：『英語教育のパラダイムシフト 小学校英語の充実に向けて』松柏社
瀧沢広人（2019）：『小学校英語サポートBOOKS 英語教師のためのTeacher's Talk & Small Talk入門—40のトピックを収録！つくり方から使い方までまるごとわかる！』明治図書出版